大人になってゆく子ども

成長発達のリズムと教育（下）

――子どもの「自然」を考える――

伊藤隆二

子どもはよく生きているか

私にはここ数年来、もちつづけたきた疑問があった。特別な病気をもった場合はのぞくとして、生れたときはどの赤ん坊も同じように呱々の声をあげる。母親の乳房にしがみつき、貪るように乳をのむ。そして半年もすぎると、腕や足に力がついてきて、ハイハイをはじめる。一年近くになると、つかまり立ちをし、やがて初誕生を迎えたころからは、歩きだす。歩きはじめた子どもは知的好奇心にあふれ、何んでもさわり、何んでも見、何んでも追いかける。あとを追う母親のほうがへとへとに疲れてしまっているのに、子どもは少しも疲れず、活動しつづける。遊びつづける。

遊びをせんとや生れけむ
戯れせんとや生れけむ

遊ぶ子どもの声きけば
わが身さえこそ動がるれ

（『梁塵秘抄』より）

しかし、私の疑問はつぎの一点にある。かくも生命力にあふれていた子どもが幼稚園に通いだし、小学校・中学校にすすみ、そして十五歳をすぎたころから、なにゆえに活力を失い、生命はしぼんでしまうのか。もちろん、すべての子どもがそうだというのではない。しかし、少ないからといって安閑としていることは許されない。コレラ患者が一人出ても、一億人が震憾するではないか。

ほんらい、生命力にあふれているべき子どもが、特別の病気にかかったわけでもないのに、息もたえだえになっているというのは、これは大問題である。今後、ほかの子どもたちに波及していかないという保証は全くないのだ。げんに、活力を失った子ども、それも肩こりとか高血圧症とか、五十歳以上になってからでないとおこらないといわれていた病態に早くも陥っている子どもの数は確実にふえているときけば、だれでも日本の将来は危いと感ずるのではなかろうか。

では、なにゆえに、今の子どもたちから活力が消えうせつつあるのか——。その原因をつきとめ、一刻も早く、子どもたちのほんらいの活力をとりもどさねばならない。私はここ数年来、関心をよせつづけているのは、まさにその点にある。

× ×

私にわかったことがいくつかある。なにしろ、今問題としてあげたような子どもの相談がものすごく多くなったのだから、私にはそうした子どもたちに共通している点が、自然につかめてきたのである。それを要約すると、つぎの三つになる。

㈠その子どもの成長発達のリズムがくずれている。

㈡その子どもの「その子らしさ」が「十分」発揮されずにいる。

㈢その子どもに心の安らぎの場がない。

子どもの成長発達のリズムがくずれるのは、その親や教師があせっていることに最大の原因があると、私はみている。かれらはなぜそんなにあせるのか。ピラミッド型の社会構造

の上へ上への這いあがり競争に子どもを参加させ、一刻も早く勝利をおさめようとしているからにちがいない。親や教師に子どもがその競争に勝つことで、しあわせになれると、信じ切っている。だから、他者よりも一歩でも先んずることが「善」で、おくれることは「悪」だという単純な基準に支配されている。その基準に照合すれば、子どもの、とくに知的能力を早く開発することが「善」だということになる。いわゆる知的早期教育への期待が高まるのは当然だといえよう。

「三歳児の漢字教室」「四歳児の算数教室」、それに各種の英才教育研究所などが、雨後の竹のこのように、生えだしたのは周知のとおり。

這いあがり競争に勝つのに絶対有利な（とみなされている）〝有名〟幼稚園、〝一流〟大学に直結している小学校・中学校にはいるためには「幼稚園からでは遅すぎる」のだという。いやいや、書店には「生れてからでは遅すぎる」という本が並べられている。

では、このような早期からの知的教育は、ほんとうに子どもの知的能力を開発促進するのだろうか。そのことを確認したうえでの知的早期教育がおこなわれているのだろうか、とそんな疑問が、当然、わいてくる。

知的早期教育の必要性を唱える人は、ひとの頭脳――とくに大脳皮質系の発達が、乳幼児期に急速にすすむためには、より多くの知的刺激（最近は情報という）を与えなければならない、逆にもしこうした情報を欠いた場合はアヴェロンの野生児や狼に育てられた子どものように、能なしになってしまうという。全くそのとおりだと、私も一応は認める。おそらく、現存した人間のなかでもっとも知能指数が高かったといわれているジョン・ステュアート・ミル（英国の哲学的・経済学者）は、過酷な、ともいえる父親の知的早期教育の輝かしい一つの成果であったといえるだろう。ミル自身の手記によると、「父自身の考えにしたがって、最高度の知的教育を与えようと、前例皆無でないとしても、世の父親がめったに見せたためしのないほどの労力と注意と忍耐とを傾け、」三歳ごろからギリシャ語を、八歳からはラテン語を、十三歳からはリカードやアダム・スミスの経済学を教えこんだという。ミルは十二歳までにラテン語でギリシャ・ローマ時代のすべての書物を読破し、数学は難解な微分・積分の問題をことごとく解決した天才になっていた。

モーツァルトもベートーベンも早期教育によって偉大な作

曲家になりえたのだという定説はもう一昔前に成立していた。

野生児のような〝能なし〟もミルのような〝天才〟もつくろうとしてつくられるのだといえば、教育万能主義が幅をきかせることになる。おそらく、第二のミルや第二のベートーベンを夢見ながら、わが子に早期からの知的教育をこころみた親は、これまでにも相当数、いたのではなかろうか。

では、それらの知的早期教育はみな成功したのだろうか。第二のミルやベートーベンが続出したという話はきいたことがない。それどころか、そのような無理強いのために〝不幸〟な生涯を送ったという例のほうが、多いのではないだろうか。

ドイツのシュレーバー判事も父から知的早期教育を受けた一人であったが、かれは四十二歳のときに妄想病で入院し、かれの兄は三十八歳のときにピストル自殺をしたという（シャッツマン『魂の殺害者』より）。わが愛するミルは二十歳になった秋に、突然、精神の危機に見舞われ、父親を軽蔑し、六十七歳で亡くなるまで、一度も幸福感と心の安らぎをえることがなかったのだ。また、モーツァルトは幼児期から病弱で、六歳のとき肺を病み、九歳のときには精神錯乱に悩み、十七歳ごろからは収入の道もとだえて貧窮の極に達し、そして三十五歳の若さで他界した。

モーツァルトのように神童ぶりを発揮しなかったベートーベンは父から何度も鞭打たれたという。かれの幼児期には、何一つ楽しみがなかった。そのピアノ練習の日課はあまりにきびしかったので、涙のかわく間もないほどだった。生れつき醜かったベートーベンは性格も暗く、近所の少年たちからも嫌われ、心気症に悩みつづけていたのである。

危険な知的早期教育

今の多くの親はわが子が、ピラミッド型の社会構造の上への這いあがり競争に勝つためには、幼児期からの知的早期教育は絶対に必要だと信じている。そして、ほんらいならば、早くて九歳以後に学ぶのが最適だと考えられている系統的な学問を、三、四歳の幼児に強いている。三、四歳の幼児の思考は、すでに述べたとおり、即時的で、論理性はまだ乏しい。「いま」という時・空間に生きている幼児のあたまに、「過去・未来」という時間的ひろがりを必要とする学問を注入したら、いったいどういうことになるだろうか。こたえは

簡単である。みせかけの〝天才〟になるにきまっている。

今から十年ほど前に、そのような〝天才児〟が大阪にあらわれて話題を集めたことがある。なんと、二歳十一ヵ月の男児が漢字二五〇字をすらすら読めるという。そこで、ある心理学者がこんなテストをおこなった。床に赤、白のボールをばらまいておき、「赤」と「白」の貼り紙をつけたカゴを二つ用意する。「さあ、坊や、赤いボールは赤のカゴに、白いボールは白のカゴに入れてちょうだい。」ところが、カゴに入れられたボールは、赤も白もまじり合っていたのだ。なんのことはない、「赤」「白」という漢字は知っていても、その漢字と「赤い色」「白い色」とが結びつかないのだ。彼の知っていた漢字は、色とに無関係な、アカ、シロとよぶ〝もの〟でしかなかったのである。

この坊やはいつも首から、父親の書いた漢字ノートをぶらさげていた。そして一日中、にらめっこ。そのうち二五〇字もおぼえてしまったのだという。これでは〝情報〟が多いといっても、計算のできる〝学者犬〟の芸と同じではないか。

× ×

知的早期教育によって、知的能力がめざましく伸びることは、だれもが認めるところである。その開発された知的能力が生涯にわたるしあわせとどうつながっているかという視点を見落してはならない。多くの例は、しあわせどころか、不幸をもたらしていることを示している。では、どうしてか。

㈠子どもに少しでも知的教育の効果（漢字をおぼえた、計算ができるようになったといったたぐいの成果）があったことを知った親は、その子どもにいっそうの期待をかけることになる。その期待は、多くの場合、その子どもにとっては過重の負担になる。

㈡子どもに早くから、おとなの世界に共通する基準なりワク（ものの考え方）をはめこんでしまうと、子どもらしい発想や何ものにもとらわれない豊かな想像性の芽がつみとられてしまう。

㈢幼児期（私のいう〝幼虫〟の時代）の特長は「体得」を中心とした活動にある。手足やからだ全体を思う存分、動かし、文字どおり、体あたりで人間として生きていく知恵や技術を身につけていく時期である。いわば能動的時代である。多くの知的早期教育は子どものそうした活動をおさえて、一方的な知識の注入に偏している。子どもは〝受身〟になる。

つまり、幼児期に知的早期教育を強いれば強いるほど、結果的に、子どもの成長発達のリズムはそれだけ大きくくずれていく。

成長発達のリズムのくずれた子どもは、しまいに活力を失い、その子らしさを発揮する機会がなくなっていく。

ほんらい、子どもはさまざまな体験をとおして自分の得意とする能力なり才能（天分という）を発見し、それを存分に発揮する機会を待つものである。〃幼虫〃がときがたてば「蛹」になり、「蛹」はときがたてば「蝶」に変態するように。

しかし、もし逆に、親や教師のきめたことを、それも受身の形で、たえず、させられていたならば、子どもの天分は剪定され、〃没個性的〃になっていく。

なるほど〃優等生〃然としているが、これは先天的に与えられたからだの骨を削り、肉をそぎ、鼻にプラスチックを注入してつくりあげた〃人工美人〃と同じだということにだれでも気づくはずである。

しかし、美容整形は不自然だと笑っている人でも、自分の子どもが遊ぶ時間も、寝る時間もけずりとって、知的早期教育に打ち込んでいる（いや、させられている）姿をみて、「不自然」とは、なかなか思わないようである。ましてや、整形美容をする人にむかって、それほどまでして「美人」になりたいものかと非難しても、わが子にむかって、「それほどまでして〃一流大学〃にはいりたいのか」と小言をいう親はいないのではあるまいか。

× ×

活力を失った中学生や高校生と接してみて驚くのは、かれらはいつも何かにおびえているということである。たえず、おどおどし、たえずいらいらしている。

そういう生徒をつれてくる親に接してみて、もっと驚くことがある。口数や小言が多いということである。いや、それは表面的なことにすぎない。じつは底知れぬ不安をかくしているということである。その不安が子どもへの過剰な期待という形になってあらわれるのだと解釈することができる。

親の過剰な期待は子どもにとって重荷になり、子どもは沈潜していく。それをみて、親は小言をいう。そしていっそう不安になる。他者に負けてはたいへんだという気持からあせるようになる。親があせればあせるほど、子どもはおびえる

ようになる……。これは悪循環というものだ。

子どもはいっそうリズムをくずし、その子らしさ（天分）を失い、活力をなくしていく。

×　　×

不安をもつ親のいる家庭は、子どもにとっては心の安まらない場所である。

しかし、そういう子どもほど、何はさておいてもほしいのは心の安らぎの場所なのだ。

多くの心理治療家は技巧をこらして子どもの悪癖や不安を解消しようとする。じつは、右のような親や教師の一方的な教育（人為）によって、活力を失っている子どもに、さらに技巧をこらした療法（人為）を施しても、根本治癒にはいたらない。

子どもが求めているのは「人為」ではなく、「自然」なのである。だから、不幸にも活力を失った子どもがいたら、その子どもに必要なのは「教育」という名の人為ではなく、自然なのだということになる。

では、この場合の「自然」とは？　文字どおり、天然自然の世界に放つことがのぞましい。しかし、自然破壊のつづく都会では、それはのぞめない。

では、どういう方法があるか。私の答は一つしかない。それは「何んにもしないことである」。これは人為（＝偽）ではなく、無為である。いいかえると、子どもの自然の（いや宇宙の）成長発達のリズムにもどることである。

子どもだけではない。親も教師も、である。宇宙のうずに身も心もゆだねて、おおらかに生きることである。

人為を捨てることで、はじめて子どもの真実の自己が実現する。子どもは自ら、なろうとしてなっていく。そのことをどこまでも信ずることが正しいのである。

幼児教育は子どもの真実の自己の育成の出発点にあることを、私どもはもう一度、確認すべきである。

＝了＝

（神戸大学）

○参考文献

『育つということ』（伊藤隆二著）柏樹社
『よく生きるということ』（伊藤隆二著）柏樹社